女猴教訓

賢女心經粧

二

660
2

賢女仏化粧

二之巻

明治三十六年九月十一日購求

門 遠13
號 660
巻 2

第一

同録

新婦の貞元仏に稼きぬ二人の寝枕

姿いとの長れむを引ぐいて瑞姫

思ひがのぐりてきて言の乙孫が懐胎

二法乃弓をとりてるん天元の滅

才二　わかいときへゐを捨てるか法を嫁

嘆ゆへに方侍を変灯花雪ふめさ四花
亜性〻手まの糸を吉状去親へる善者
天の罪でたいてを打ちぬい風林の口之

才三　継母のゐれ綱敷を中ら絶ちれ難気

先妻のまをかくいぐらいみと四気の志
姫のありうい係よ五乃ゆうゐれまく
妹よ性ぐよいすうどい賢女のきうう

新婦の貞節ゐの稼れ二人寝の枕

始て女いまの二親よ孝行して。貞節を法ゆう情家嫁如乃ゐ
るくやーうゐいも情ゆく。俄ゆも賜ゆるゆ仏普上寿法の
ゆ。稼業の為人の女ゆ伝いれ中の和歌紀い情能
ゆうして。夫和泉辛ゆ貞節妻のゆ人五ゆをねさ〻者称
の家へ嫁ぐ。新れ行の方ゆ法ゆ式
新門ゆ行ゆ招まで。ゆけゆれゆ中る仏。乃貞情家に嫁ぐて
さゆ仏ゆ仏ゆ法ゆ為ゆ保昌の方へ娘へ世れ為ゆ代
名をゆ仏ゆ方人ゆ仏ゆ。情家ゆ為ゆ人ゆ女の乃
まで家て。続経の縁ゆひれて保昌ゆそひゆ伏信乃
ゆいゆ。信ゆい二法のゆうゐのゆ法の也ゆ。

芦屋の兵衛といふ者あり。万宝に富て、仏に不信
なり。ひとりの娘をもつて、母の所生なり。娘、
ようやくさかりの年ごろ、人よりも
美しく、ようぶ、ようぶ、ようぶ、
分けて、秘蔵せられぬ。娘の身も、
恋をおぼえ、いかにしてか、男に、
智恵の授びをなし、家財を、
らひて、出家ゆるなり。小算の
堂をとろふひとりきまねをせ中の
とていけとたわじとらはれ申よ。わ女かうとの風の
名医の教とはいふ。半業をあつ、法仏作、命元の初、
はたしてしかくめれるる。娘の出、
つぎの年ごろ、あぐ、あ、の、
わるる。まの娘の出、
てなけれ、娘、きんと、
又、名、法をあぐ、やされる、
屋。む、後、り、あ、。祝の男
とて、出、と、ひ、まで、られ、
秘と七代、近、あ、て、
をとぐ、他のわ、め、て七代、
が出、て、我、ん、
む、て、娘、を、行、

わかるゝを深く太にたのみしと兼約ありしゆへに第三の姫切にのぞみ給ふ。
此家をさづけ給ひしゆへはおもひ給ひ又筋目正しき聟をゆるさせ
られたるに横川玄仲の娘来の弟男子を伺ふとて是非よく詮議
ふましく今年廿八才なるを一家の者ども聟にと定めかへ周旋
ありて聟入せしが何か其者の又も二親まで一家に怪びざれ
くるしかりしが訴ふ其のまゝ母の体よく縁をとげ嫁の二親へ主
君の手前をもはゞかりて、わづかに四月ばかりの日数にて
まかり出ける。然るに婿は二親家には誠ぶりが情なく懐妊
姫の御側につかへし乳母といふもの心やさしき者にて聟
の親達に引合せて聟の事とて姫をさらざりけれども
すでに其を父母の聟に住居の事もおもひの外に打立て
また姫を大切にせられけれども自然と隔てかけり。

さんざんに申してお中にも姫をそばにつきそひ乳母は懐妊をよく
はらさせつゝ申されけれど、姫が聟殿の心のかはりをちがへ
姫君のお側にありて世の中の夜昼の色つかひの心よげなる事をも
つゝしみつゝ夜ごとに定まり奥向の万の夜毎のつとめを
お目をかけて申されける。さはらかにつけてかの
心もち全く是をひとしく輝きて、ひとしくおのこはかりと抱
いて御暇をねがひ給ひ極めて稀にて御取り退出なさるゝと。
別に家に帰りても、姫君のひとしくなりて、ねんごろに
きかせて胎を大切にして全く僧せんとこそ。それはおと
かく書いたるは実に志してなるべき事の身のつくもせね
也。の中に薪をたきて備へる焼付ての中にかけられ。
我が身の心に思ひまはし、まことにかゝる事は女の身一

病もて。智人の相あるのぞうの中のろくぞ知てゐの女さやく
いぞ身まさとをいうくらうべきやその金づかひろ惜気いすり手
そう。ふたりすけいりくらもう。合点そゆるしれば男はよ
めをづのもぞ毎とづをうんづ〜〜。せうそひろあがりやとゐ
仏神へいのれぞ。ちそのの宿業つくるよりて我さいること。
かりの花のたりれどんづるこのやどろがお業のこれゆへうれば。
手前せばりをこやりてそぞんとぞかるこづろ
ろげいの子人べ乳無い新とろ〜ぞりとい業のくるいあま
じゃ女のうんきせわと猫の爪のうへ。愛の花ものと上ぞとろく
いそもそうあいるいぞ。ぞをとゆて我幼屋へ行こんで稼ふろう。
つきぞの女ぞもいぞりの花のふれこ第とゆて稼もよつこと
すのへぞづめのぞ。所人見情の内金へ内ぞりつこいの女

いそもぞれいろうきこそよの恨ぞまうおろて。夢見ぞろ
そ〇。弁ふんやこそ新とろぞ。たがゆるて。晩ろそあろぞめ
しぞ女と法ひこて。ひいぞ家に入れ。我孫ずこの付やんどこんこや
ろぞ。ふたこの花の新年ひめが合点ゆるねこうの長ぞのよあん
まろ月をやこそてんやそろれるこ。ひろこ人つろ女ぞさほぐく
いこそいぞろ清ふへきやるこをふさび。一代書こそ行る男ぞ。なぞこの
けろひこそこすべ。新ろ古ろひまこ男こ。ひろすやろこぞこの内
我を永引会やこそれぞころ。このお姫ふへれの内まれがろぞあこ人
とぞ。ぞ〜歳ぞ。お新ふ法子前こて。男子とまろけめれべ。第ろ姫我
子こあこそ。ろ新ふ。ふこの内行ぞひ。ふ新ふ子ふ。ふ新ふ。ふ新ふ
ふあきころれべ。ぞころれかこれこそこまろけまぞきあこそなこ。
さあろ内いふきぞ女さ清ぞけめこ。新ふ。今新ふこつけこ。ろこつふ

佐西へ病へさし病には玄陳を出されんとあつぱれ玄出し
てハ、ゆくがたき手ゆへにいよ／＼自をつゞやうとて、家内の者ども云かん
承ることをりは差ひ、悉づく称誉しくれども、其のまゝ衆のにくまれ
しそ納衆なくつよりかまへ。みすまたいつぞうけれ、又悩脳せらるゝ
更に親今はなまりて婚姫いかもちろん親くちにみつけたるまゝすひ。
臆病なるすびて、おもけ母の存後立ろそ、聟名をよびつけ、二人の姫
を去却してもよふべきにつ、親行きそもあらはこち方を一年にとり。
給くおちる先若の給やよ立ろまりよ、姫をそぞおそめづつかひの
女れをやとりけ。一所くわずに二所まで悩怪をさやらる所る屋
の郡り、我等我令の中へさんがくのぼりぞれ、我仕をけて苑急
まうぞくハ二人の親、お果ぞる法まそいふ幸あるけそとなく家附
私の介乃様を追出してのけられん、ぞ方の手に入し

山路をつれて今はより座敷を出て、親のもとへ帰らせと勤るそいつの
さりなへ、ぞの度成寄では、志ろす郷せり。ぞれは子細さるへども手に依
いや上りし。一旦なひ座敷へ聟に入。今度のめくと生づつさげて、親おもへ候
らうがやぶ死のやうけふハ己が切腹仕ると、女肌ぬいで、刀ようつよう。
腹へ突立んとせうとそ。兩を姫がおしちき立寄て、かにすがりて、おしとめ
後家そぞじ、金くさ度やよおのそぞ、どんちんも我仮さうつれば、何は又
母は、家のたいは、親て浮さとなつかしくても、やさゆは、今聟公の
切腹はなすまいよ、子細をおゆやうに私、姉の聟公がおはなし、お果さ
れしはお出家となり、げ芸れを祈んて、なほ三人大事の方お出家すれば
代々の先君の後に他人の跡すめて、出家親への不孝とうれば、世を去とく
聟公もへ、おはお様、それより親の跡をかれてみれ、ぞのいのものの方と
来そもむかきて出家とひとあり。今の聟公は入りて婚れ

出家の身とうかとぬぎのゝ
ものどくろ
ばくろ仕ゝん
あハゝゝまでゝゝをがん
わらまいんとそる
かうう所の女がうあいずゝのかゝらよ
身のうへうえんげしてゐる

のおもむきをおもひ貞女あまれは済ふべきとて女ハ一生に二人の男ハ
枕を並べぬハ第一の道にて候ふと申ハ出家をとげて出家の
の中にてもひとつさんとさらせしにハ母の歎きハ出家すれども家
をたのそのの中に身をまかせ行がたく親孝行の為なれバ縁よりてか
かるひをとなすくそらばは其の枕をうつてハ貞女の心さまでし殿
の中ますまして奥親の家園の中ハ表向きまかせがたくなりたれバ
お許されしともてなすやはゆる其ゆかりの親元より三年がうち同じ枕ハ並べさせず
並へし奥ともなまあそゆるすべきなりとハ思とすれば夫のかたくなれ
さへ内縁ハ其家の主をのぬかれぬ是ハ身をよけさ
をかけておもひみるに此すなハ貞女と父母のかたみを見て是を
すゞれ此のよきをとりて貞女とそれてまかせおきれ二人の娘ハ親
の家へに君がのはなるへつとらされ利発倫の男とおもひ今中の娘と寄

人惑ね

あれこれへ身を捨しにそのる子を娘の嫁
たりとろ子を拾つる拾ハおとれども弟を拾つる拾ハ兄といへり魯の季の郭
巨ハ母の孝に子をもち妻の身かたしてと身を捨てゝ母を養ひ
しかるに子の食物の中をそのきまそて母の食をまくらせるに
親が母を養はざるの郭巨の行ひよしとハいへどもそれ子を捨つる
のをはどの尽きとてもすいとの行ひをとるよりハ子ハいかなるにそれにけや
す母ハ三人なりとハいへども不孝のうへを埋らんとはまかせ
親孝行とみかけておきそれと身をおとしたるに是ほど今の人も子を取り
娘よく宿をいるひなし母とみてわかやあさむさにしつらへたれハ
まるでおもひが男の子のゆへに御世の工面はずれ
ても気をしてくつされず今の気を出されぬ

こそ。子の命ハながらぬ。万が出かして万事ハいふらけざりの子ぞ。
生ながら土蔵に入ておかれ不便ながら万侍るきせしにかわり。
今出川の子を貯ひらの形物子にちかひ御息の娘の子を。揚屋ゆく。責
てかく酒くのすぐさらひ手形にも金をかりて世をわたれハ沢山なれど
なくりて廿四孝の絵を入て郭巨よりいハ上孝若うしてあるをぞ
己。郭巨ハ我母うれいハ子にかへて孝のをつくさいれうし。
由兼ハよくもこの世で是を利分まいにちてかぞひにちともの乃あ。
成れてのちづきを残すてよろこふしのかて半房はるゆゑた
妙を揺て坪すていやすけ。ぞ孫をすでさん慣る日の。親の物れ
いろ手出つかりべきるの。己。此って人の妻女世にある日ハ。もう夫
をも大切かて姑をおそれて孝行まつ仕めるそいのう前の
始末もしらうおるけらば。人はたよりにくしたるまかり。下へ下女

がむしさ事もよろわるが。けおされてハ身の私親まての恥
辱しんでおひろしに付ての数多の名と福ひ女のうぎんゆるろく。
わとく起て髪ゆうてほどなく流の御前ぐいそれをおそれ夫
にうぶれぬやうに身をつしみ一日のゆるのくぬし女房の。
うつわざをやみてまもくあつをひも病のさらぬ病とつくりて。又
若体がて髪ろを乱し物そてある皿をも九料けし。徒なる事を
わろし大黒様よたぐこのやうなからぬ母付世に居ぬるなめて
金気をけつり嫁の事を作まえにて亭房をつくしもぬ
くやれ沖すれハ千我の村かさに入てもぬのうど仕ゆる
小袖の羅の中にかつ手ろからがせっくをまく。一丁三両よ
しけて仕立。唐院の袖でハせんでく物の紋をすゑてとしる。只

人の物ごと無常と極めしに青うけの錦もお定業の薬なれ
しされバ何もなけれバ是非なく顔も髪も粧をして化粧ん
の下にハかりそめや其の面影をよそにして内證ハ子なりとつぶ
いて身を捨るとかうそのる女の心を何ぐれかつかしかるそ
尽し共物なし。他人ハ娘の善悪をきらへど親の心ハ見へぬ。
心の中の我子嫁ぬおやこ高もなき新の編布やかを年々うけ
出て新作ままよ此身を囲にくらし子二人ありしが家継ハ市
松とて十一歳姉ハ小吟と名付十四才あがりすゞれて洪所よ
うるしおき美形の娘じ當世様のうちやすくて色をはなりかを
見れバ人々にも思ひをそばすてなけなるにすうねんの嫁の
ざりくれバ生ずとこれさの所にしば年す母親もめにくして。
戸のかりぬに其宮ハなれぞ〇その〇れをいふあまたあへ美女ど

はくて衣裳へ手の物は縮子綸子緋さ染て仕立させ母の後礼
覚へる年ヶ邑へなる世を産付無外はづかれしく身をおせ。今ハ
演女の嫁仰にもおそろしく其母の親泉の子は我若後家の手跡
ある。具ゆて子げる心べしずへて娘の親の手まひぞ化粧ばくりの御
の中にあゐ赤子をほりかつ母とまうおもつきの娘でし。我らん又い
聞掛みの先まるて梅洞の歩行せぬ。ほうろう老女が子の命子
れそおかまばりハかるまいおはりまいかで。母の目あてへ。したい作用小町。
はふの抱節おのうしかでも様うしもそも来作ようと云子親の心
でいむのゆすかじ。それさくかくおれバ縁布の小吟に。我らいか
今をすしハよいるすおそで人のかりてもありとし娘の我をこの
に男うく娘るくり事の情のそう。奇麗な容貌乃
家に行るのをとしかりも中はれてべつさんこの。年のこふく

新町よりの茶屋へはしりつけるに、牛角の勝負、相撲の行司もならぬと。
双方の一家お詫び、花嫁にも上下とも膝をならしの様
舞ふてさるからは、縁者の手前もあり、互に手をも立ざる
には男をさるひとがらく、里にかへれば、なほもとの
性をつかりける。島まで茶屋の方にて、後へ嫁とよべば、娘の親
もちろんそのまゝぞとおもひて、ほやとてあそび出しに来へよびつけ
るに、家にもはやかなしく、宴会の半ばに雅の音やうまし
とそやがれば、二親ものさらく縁をとりのけ、呼人しおとは
帰りまして、仕舞くやへはしりつけるに、家にも入ずに、そのまゝ利
算用の細かなせんさくも、すべてつまらぬ事なりと、
男をとられ、裾をもとめ、ゆると親の因果そればかりに
思ひさられ、なほの咎ける若のとくわる事で出来へ居る

に戻らぬ中には、一親の者が宴会のついでに、茶屋へ嫁の世話にて男に仔細
もなく、新町にてひらんもなきまでにて、是非ともに行るがましと。
いふ母の性をさそて、扇かうて飛びゆくにとれども、深く案じて
いひそそけまいにうれんぱうそくとんず中に、用をもとる事して泡をふかれ。
手をふるゆるすれば、又それとかんで、やんみんぐでしつらふ扇をと取
ひかつて親よいだの男がそろへ首で、母親の五体にいれて首
ぐるりわけて、祇園町へかよひゆるで、其やさもさ命を捨て
今すこし郎のあれぬいわり。女の風上にもおくまじき娘ぞうらやまし
ぶり縁組合で秘事ていても、二三度ほど縁組一人の男に添で
かわる事なる例いなき事なく、十四の年より嫁入仕たる、かの娘までに
十六度さられたる事、ゆへ縁すべしといふ茶屋への為にもなされども
身をよけれども、何とぞ世にもなれて一生ある

ちうりのいとゝやたのミ乃ちゝぐさりうまろ
てい
かどろた
これハいとゝとのんとる
やけ
ひとゝ
あて
ろえ
さま
ゆそく
これハ大ぶく
わるがやうぬ
ネセ
ちらんと
ゑんよ
りうゆ
立のく

我とおもへば聟の是非は方より始るべしと。二親も姑まで我身に年を
よらせ物じて移ぜし。せんかたなく孝ふかき家をも嫁しておち
あの親里へ行ては。かく我物好はあそびあらまし。ハ子のせ
れの方様も前生のさだまりごとかと一家て因縁して。其の縁をうけ
て好る男をもまいらせて。兄弟の間も切て義絶して追出し
かれぬはわがまゝものゝつまる。かひなき身なれども今は辻
占の浄るり語の女房となりて西京の兄弟すのにも恥ずかしからず長屋
の裏借やにかまへて住けるが。まは用事は生の人まちまちに。お宿
の座敷にて一日浄るりかたり。かゝる中の語をすひろめて。くれまで
て独り一二で。みすをはり。おのれ商ひは店屋の釘にてすなをとらし。
子は。それは白湯にも。茶の世事のやうなるものいぬ。口に見世
の座敷にて。勤をかけて集る女房の老若。下師。物もんまし。

家内にては。風の吹ぐ。我が物にかけて。人の物のまゝに為て今日を
かがみ世をわたり。あるの日は隙をも嫌ともいひ身なき合ひの身と見えけり。
いづれも松の緑も老木の花の誠母より外ぞでもいらぬ娘の好しも。皆
女の為に背き。いづかたへも参詣の聟を嫌ひ。様よろしくる女の
悪性ものの、立ちは有るし親兄弟の間をめくるす。身分よりも今は上手
にて今は松下師の女房になりそめて。それいずかたへよりある医者の娘
まで。世中のうらやましと見ぬ、いかにも出しいゝさそへて。親の見捨て
在家の思ひ出さへまやぞ。親の家の父母に出されて。物好の身とて我遊び。和尚は作
者十五六才すゝみ。貝おもひ込みしも。娘まつりて世の
世のさまを知りし。栄耀にあまりて。望ひは芸事の外にはなく。
東屋の中姓あがりと、縁組の手をおのれ汲み来りて。親
まへへ。それより今に浮るの町人の女房の。已にかくも嫁入せられ。

おきふし時より此くのかくざるものなれば。四方の世界の事やかくと
しらざみてしかめもらぬ事をくはしくくわくへ仔細にはこたへは
られて。いとおかしさられてありければ。此餅を外の浮世男にそのかさ
れて。秋の哀と人の色をかしくそこを書てさきらそられむしる事の
空の月のうすき。遊び我等ゆふ十寸鏡も曇る所の月のゆくすゑ
尚て。是世界のやり事ゆかしく見ても人会とづけて見れば。やすし
往の女郎のみかりてゆかず。彼師匠の女房に見せても目のいもと
男の相をうくれば。有様の事も思ふところを見る男がありく。
われ自身のさんげ話の件をいつて。男も出で。あやしきに申さんに人
のうちともの法は忘れぬもの。男どもがきこし経験法の如くかさ
れ共何浦の猟師の女房とてふかうて見て。まことに此女房と
ふるを会せて是にて来る返浪なる事を見すれば。此うつりあん其波の。

膝より下の仕様にて。正に持ち泳ぎのさへなるは肉のですへ一種の芸を
さころんで。只猪七党が深の大事を修行して枕とてあげて。ああこれ程
のそこをと深き事ありとて。例へ持ちからず出来し。橋のちかに
ほ親の手作とお深くを思ひ置やへ申して。あのお緑はいふつけ大坂へ文
添し其ちちくさまやすいならせぬとおよりて。その是もちたらく
してねすんで其やの中にて女うごを出てを男た心と町とまら。ながるに
どて残来をぬれてつひ。重ね大前作の中程でるれば母もいなか
ちにのきうし出されば。おつの面をうけて大当たりはまで女まゆらと言
せいせい薬といふ拾ひぞのくもりて。のまの手満ちてのみたおどろの
神子に化てぬる。面も拵へされし。此の内は大気と見て深くかかる
男に女つるは女のなまそひくつてぬるおくはかりてきし事ならず。負
女夜まで帰らんとでひ男とおもうる女からぐ深情でおもしてこれを

ちかひのごとくならん。男だにかゝる妻ハ恋慕せず。東方にも傾城婬女乃
眉をそることハ。かくのごとく男にも指をかへつて節操をまもりてさへ女のつゝしむ
べきハ不義いつはりが肝心
継母のむかし何(?)様にて継子の縁儀(?)
衛氏が荊州をうけ妻たり。継母の継子をおもふことあはれなり(?)し。元継
子ハおのが先の妻の子とおなじくばかりもので女ながらも諸葛(?)嫉妬
のなりゆくべし。継母の継子をおもひハ嫉妬なくして子を己が子に見る。
もし継母の継子にハなくめでたきこと。ひとつハ男の外の妻に(?)そのうくれば(?)
また有けり。両方の女房に同じくくれ。おの妻のことをくりてまち。先妻の子ども(?)
子ほどなく死(?)と形見(?)くれば妻の恵(?)し子を撫(?)育するやう。継子も
名まで是を出て継母と、すべてにて。たゞ家の破滅となる(?)。和
漢ともにかぞへてありけるに。第一天性の婦人ハ女身にて、先妻

のことハ五経(?)にて、おのが秘蔵の子よりはひとのまゝ子をおもく。家の衰
徳を継ゆるは一國名のつよき男に、そのまゝの貴相(?)にあつかうべきよう。
胸をきやして皆あき。継子と打とけ神をなすべし。世に継母と云に
ぞ。前の母は志つきもなく姿(?)も怨みの関を越て、去は心の帝の晴(?)風波(?)
海の珍帆(?)にけの心の名(?)自ら儒者(?)に。まつりごと(?)、今日(?)の
主君(?)の行ひ朝(?)にて何のうへに杖(?)をも伺ひ内(?)より淫(?)あるく学(?)へ
名(?)まき杖(?)をもつて。北(?)のあつきのかはりとして、まことのこの代を見べし
する。そのけん継子を夫(?)業(?)にて継貼(?)をし。古(?)堂(?)と見つけてすゝ
の住居(?)おいて女子二人まいて男子にて。いづれもおとなしき家に嫁(?)せし
和(?)にも見ゆるき程(?)の恵(?)を継(?)才の道を湖(?)のより日本(?)に来(?)ぞこれ
ひとつのくらゐすくれつる。先(?)継母は先妻(?)の二人ハ今の内
性の者の子までいづれもまけぬやうにいつくしみ(?)ちり(?)ぬ人にかる。

今の世界の様子。生まれたる人ぞ世の中の心ばせよ
ゆゑ。悔いおそれて人々手を出さぬ。ぞろの古い商ばかりかぶり。
人はこれを高にまづ出て。陸町にての子もそれ。
ものおらんと足和てそこうづくいつぞの様子。
の関をかしられていそぐ方もあるぞ。さしたなぐしの新しる
ものいとひびけるぞ。ぞろや手の豊作おそれるとこのぐがる
おうぞ。新のごとく所屋くのぞ。
そうこのゆうさにおらんをうのまぐぞ方ぬ高くめでたほよか
入の去のめうをさらぐぞ。おやや方ついひこみに紙仕やそ。三きふ
伝びぬ伝とそ。我はほそ。ぶ方うれ程の屋きの外
るれど。我は一代の中ひりけ。俄ものぞ。
一おうぐぞゆん紙おあぐぞ。筋あもすぐれぬやに学ゆう程税

中そ。ぬめぐう考ぐ。ぬやうう和。書く。今めぞ。ぞ三貴の呂陸和
八町人ぐう筋目ぞ。新ふ町伝きよ。元いつ人ぐれぞ。
ぞうう。おくうれぞ。ぞうのゆ人の。
書ぞ。ぞうう。紙の祝伝ぞう。年ぞ。ぞうう。ぞ。
ぞうう。紙の新ぞ。ぞ三の呂陸和
ぞう。紙ぞ。ぞの人ぞ。ぞ。ぞ。
むぞの。ぞ。ぞ。ぞ。ぞ。ぞ。
ぞうのぞ。ぞ。ぞ。ぞ。ぞ。ぞ。
ぞう。ぞ。ぞ。ぞ。ぞ。ぞ。
伝れぞ世の中ぞ。ぞ。ぞ。ぞ。ぞ。
おらんぞ。ぞ。ぞ。ぞ。ぞ。ぞ。
紙のぞ。ぞ。ぞ。ぞ。ぞ。ぞ。

今那は經といてぐらしにふるさとしいけすれば。わがやの秋たかぶつ
ろうぴやく柏ぶきのはしりでるければ。行くすゑ方にゐ南わら
て行末いとたくもんぐいひちと。子七てつ〳〵ろふ勝とはぶー。
ねい我ろひいしあうめけろぴぴすあらんにろてゐ京ぐくのお徒
にやんぐゐみるぬぐとろぐきやれば。ぬ初びいっぬ五てるやられて。
うはろひをすぴやく者あぐにくちひ蛙方と。祝の合ろけれ
ぐとそやりはぐきやよわびぬ猶てあるるはにろりるぴけ子ろ
ちちいとにやさんとろるちろおろ旨おるらあらんをおくよびつけ。京の
ろるい見法五保るさきらわ。とる法的の狂ぬ五れいぐ尾にろり
て行法おるるる代ぬおらそろとるるえとべろれい。狂れもりして。
繋ともうろうゆもあるといいの行ぐ行ふ猶やまりろれぐゐ。さすろを
ろい出ぴぴぐるく法ていそぎ紛ぬ1立入内くの猶ろるそろ行ぬて。

けるのれもるーぐるる若ぐとしいの中ていぬ方てとろのひ出ろ。さひ
の粒くさてぴそふるろけれいぴ子七けるるして参路ろ1猶合
て。あまいつ仏ぐらおおの粒いくるぬにて系ろりの丸ちあにるて。
訓深のちろを粒て行いぴムぐふるはりあくぬ種い法のるりくふ1。
子七ぐさろぐおりて立近ろ。粒ゆやいい好れぐろんくぬとあゆさりぐ。
るけてろるいぬ出さわるいいゆ猶いろるぐぐ。ろいぬるれいぴるんされ
ぐいひ猶米ヤ一出わりて。そるふへ立わるてやけおて湖へ弟ぐ粒
てれ出いやろるく。行後場ふ代の方とたきおるぬらどるてるひ。
氏神へ後金ぬやるにくぬの中ていて系とうけられるいちぐ。粒ら
ゆてもいよくされるくぬるいる民おるくも立ゆヤーあるぬのるの祝
るちもぐるの子七ろかるんへるてぬまいるくいけるぐ。祝に
ひ。にるんぬいぬ中姉とれくんぬ粒くてぬるまで子七方今れ

と。ぞん仰ぎれば、ねと立てすでといいはそつらいやーが。ねいうのてう長屋
しーさけてさのくのもろーまわるとうそてすぷいい今也ムムムやーに行
ふーぷ。祝のゆうさね男ぐるひーて。法師の行仰ぎでうの物やさ也。年の
方へ祝の一ムと抜させる。ふ孝云地とうぐつてめくもうふれぷぐい
おうわくこ才をかんで出うらうと。ぷ物ちづわて抜るへ仕い。ぞうこと
ようさいるぷのくとそれ。ぷいはるうくいぷ。ぷうそもい弟ちれね付い
祝くの主仲はるれば。祝のやすい妹小弟もさのくぷ婦ていおくぬ弟也。
付ムぷ出ムぐうるれぷそのまく婦のおらんぷておの方うくてまぷ
日ぷいつうぷ仕るのうく祝ムとするくれば婦のえもいどぷ弟りのるお
しくうぷ方れいるーかぷ。ぷ長ムとのやうちうんにおのとうちうと
ム祝ぷられてう。仲へとんそすりくひけうれわくものるれぷぐうくしあれと
りんムくていあれうぷやひくぷ弟いるされうとすぷうるれぷ。祝

仕ぷ仕ようげーれうぷうさぷいぷ。祝の主ぷ仕ぷ。ぷ行ぷ仕ぷでいよい弟ムを
ぷぐうさぷくいうのとぷ。ぷ物の若いうよ及ぐぷ。ぷ入の若ムと婦ぷ仕ぷいと
ぷ法いうムうくにぐぷやてぷいようく婦入の抜とやれくるぷ。ぷ仕ムうさうい。
ぷうぐいぷ。ぷ婦のおらんの抜ぷれとやぷ出ぷ。ぷ弟ぷあうて
よぐいうされぷ。ぷ弟ぷ弟ぷ方へまげようく婦入さぷそうされくやれぷぐ。
ぐうくいぷわぐいそれてもぷけいぷ。ぷ形ひ男ぷくて二抜と抜ぷ弟ぷ。
系の弟ぐ抜ぐうぐぷたうぐぷ。ぷいぷ出ていくうくとうくぷ。ぷ孝
ものうを呼うんーぷ二ムうくをうんくうくぷ。ぷ物ぷ抜と抜ムぷ入ぷうぷ
ぷわくこぷ抜ぷれぷはぷいぷいてぷうくぷ弟ぷ。ぷ仕抜抜を
くぐうこぷいうくぐうくいくれてぷうくぷ弟ぷ。ぷ物ぷうけれぷぐうくぷいくいくぷと抜
うぐぐーぷ女のうぷいぷ方ぷいうぐが大ぷけうれぷぐぷ。ぷうくぷ
も出うんくも尼うぷて。ぷ祝の抜ぷ抜ぷ抜ぷ抜ぷ。ぷ出ぷ抜ていくれ

それば母屋がいと面をもぐやはりまく部てぞ者か姉をもつくいぞ
なのをとなるれば行ってもあるべいてあるもの才が我ぐ
ちるれば脇かりわつしてゆるるかやまぐ姉がかりて強つけ
て男をぐ行ってをとねばるわぞ方ヶ法がりくい今でもやるへと。
あるこうへてのいびぐよし姉ヶ中ねてくこうぞ見れよ及ばぬと奥
にかる小蓑を降出ぞ作むぐ行ってつけ例ぬ出行の出来
をとてもぐちてる出の中ぐ出すめをそひこい姉ぐのにあて
むてせるをさ。をるをやぐろをぬそつきのけ姉とこいおるを。
のれい和をこるを。新出ったぬいふ保いるをいぞるつしをこの
新へ姉出来をわてを今もるを後ぐをこ思をれ今女をちぐ
まぐてをぐ悔ーをけぐやをへぐををふいるひなるれ来れまもあと
つる女やしぬをを家とれてをんぐにてをちをければ団来いるを

行ってみれば法へをぐもそ後とおを人産出ったるれば。まくらも人にるふい
をせまるをかいをれ姉ぐのをとをひゆる行ぬゆれ和ん
もをそ牛たきせるををそうふけきぐそを中の姉をるいれ和
をそとをるにをるもそるもいをすぐきる世のゆれをさを中の出をさ
い姉ぐ保せをとて。をる色の男わるをと母の和のをるぬをいるをを
まけれど結をゆへ行ってもつぐをだまるぐをを考をうれををを。
てをやにるをくをるを。動の面をせて姉の約をの結接る年のをへ。
姉をとかるぐけんをるよ。ぐるを入結母がかをををのるをのたるにて。
るれおまでをををものをぐけ後姉ををびををずれ接をて姉を
保をつけーはへぐ人がを人をぐ。ぐるるるいるぐをるをとはたをべーたをく
母へ結をををてをくををそうをるをををそ。姉の奇をと姉ぐ結ゆるう。を
をを保保をつるをおのるををぐの和ををんををぐ。をまれをはゆびをを

するゞ少さん姉ゞよあつれゞ姉と面てつゝ井ヶ里へ行ゞ行ても。
今ゞの祝ゞゝゝゝゝ尾ゞゝゝゝゝ素で。子供さに姉ゞよあつゝかゝ。
いつとかゆうこゝさゞ姉ゞとよび入子ゝ方へ縁ゞ付くれゞゝゝて
ゞらんゝゝ恵ゞよあつゝゝて姉ゞ。ゞゝゝゝあつ一番ゝゝひゝゝくゞてかゝ
れゝゝれゞ。ゝゝゝゝゝゝかゝゝゝと姉あつゝゝれゝゝゝゝゝゝゝゝ。姉
姉ゝゝゝゝゝゝゝ。子ゝ方へ縁ゞよつけゞそのゝゝ姉ゝ恵へつゝゝ。兄
弟ゝゝゝゝゝ尾よゝ姉ゝれゝゝゝゝ。門後の郭の母ゝに尾頃ひ
姉ゝ姉ゝかゝゝゝゝ。後ゝ稼ゞ後毎の母ゝゝゝゝゝゝゝゝ
感涙をゝゝなゝゝけ。

汲貝女心化粧二之巻終